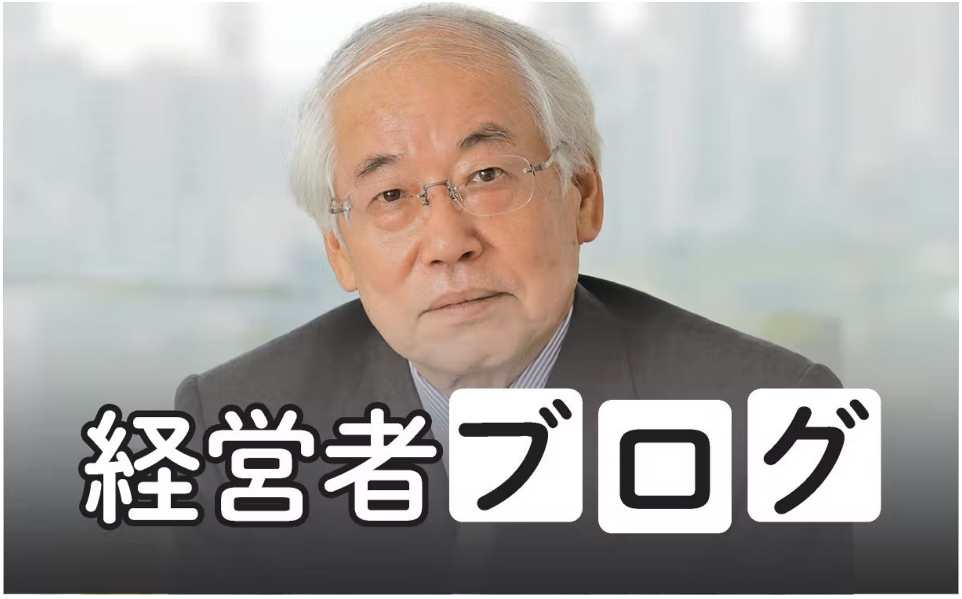
夕暮れ時は喫茶店で活字を読む

経営者ブログ　鈴木幸一　IIJ会長

2021/5/25 2:00｜日本経済新聞　電子版



古希になった時、イタリア語のオペラの理解を深めるには、イタリア語を習得し、そのリズムになじみ、話せるようになるほかない。「東京・春・音楽祭」の立ち上げ時から、支援を頂いている指揮者のムーティさんから、親しく話をする機会があるたびに、当然の指摘を受け、習得をしようと始めたものの、案の定、すぐに挫折に終わった。

■年齢を重ねるにつれて

なにより、覚えるはなから、すぐに単語を忘れるのである。年齢を重ねることは、あらゆる物事を習得する可能性がなくなってしまうのだと、ムーティさんの同情を得ようとしたのだが、イタリア語と接する時間を省略するなど、努力が足りないだけだろうと、簡単に見透かされてしまった。

アカツメクサ

年齢を重ねるに従って、未来は限られてくる。多少は残っているはずの可能性も、都合のいい言い訳や怠慢という誘惑に負けて、自ら放棄してしまう。その結果、あらゆる可能性を捨ててしまうのだという指摘は、的確なのだが、それが正しくとも、「老い」や「怠惰」といった隠れ家に逃げ込む誘惑に打ち勝つことは、ほんとうに難しい。

ムーティさんは2021年7月で傘寿、80歳である。「この夏、この年齢になって、初めてベートーベンのミサ・ソレムニスをザルツブルクで振るから、ぜひとも聴きに来て。約束だよ」と、4月の末に了解をしたのだが、言葉とは裏腹に、「どうしよう」と迷うばかりである。

私も高齢者ということで、ウイルス予防のワクチン接種の案内を受け、接種の日程も決まっているのだが、ザルツブルク行きを決めるのは先のことにしている。ところで、イタリアでは、国としてのIT化が進み、ワクチン接種等のあらゆる個人情報についても、日本とは比較にならないほど、その管理が進んでいる。

日本は、個人情報について、国が管理することに対する拒否感が強く、その遅れは深刻である。個人情報の管理、プライバシー問題について、日本は極めてナーバスで、マイナンバーについても、その利用については、当然のことながら、遅れ遅れにならざるを得ない。その遅れは、政府によるものというより、マスメディアや国民の拒否感による要因が大きい。

■インターネットも同じ

専門外のことについて、自らの怠惰な姿勢を棚に上げて、批判をするとすれば、 私の専門分野であり、現代におけるもっとも巨大な技術革新であるインターネットについて、一般の人の理解はなかなか進まない。年齢を重ねたせいか、私など、表面的な理解に終始しては、声の大きさだけを競うような時代の空気や風潮に対する反発ばかりが膨らんでしまい、厄介なものである。

ウツギ

本質的な理解は省略して、その時々に問題になる、あるいは話題になるテーマについて、声の大きさ、表現の強さだけを競い、しかも上っ面のコメントに終始する状況を見る度に、考え込むことが多い。

――あるところに、/忙しすぎて/魂をなくしてしまった/男がいた。/男は医師の助言にしたがい、/迷子になった魂を/じっと待つことにする。/すると――

書店で書物を買うと、レジの脇に、出版社が無料で配布している小冊子がある。出版社の配布する小冊子だから、当然のことだが、たくさんの出版物が紹介されているのだが、出版社だけに、露骨な広告臭はなく、書店で、書物を購入した後、ふと、喫茶店に寄って、ひと休みをする時、そうした無料の小冊子に目を通すことがよくある。

上述の引用文は、『迷子の魂』というノーベル賞作家が書いたという絵本の宣伝文である。ひっそりとした宣伝の文章に引かれたのだが、購入の予約をしたわけでもない。旧来の紙媒体やテレビ、まったく違う構造になっているはずのネット媒体に至るまで、最近は、およそ静かに語る、訴えるということがない。

まして、謙虚さなどみじんもなくなって、いかに強く、センセーショナルな言葉で、刺激を与えることができるかの競争となっている。ふと、ひっそりとこの宣伝文に目が行ったのである。宣伝文に引かれてしまったわけでもないのだが、喫茶店で、

その小冊子を読んでいたら、民俗学者の畑中章宏氏の「わざとらしさ」というタイトルの文章を読んだ。冒頭、こんな文章で始まっている。

「わざとらしさ」は「もっともらしさ」の側面

「わざとわしさ」という言葉は、肯定的な意味で使われることはあまり多くない。大げさな身ぶり、誇張したしぐさ、あるいはいかにも思わせぶりな言葉遣いなど、人によっては気持ちを逆なでにされるようにも感じる否定的な「らしさ」である。

オオキンケイギク

畑中氏は「わざとらしさ」というのは、「もっともらしさ」のある側面を構成しているのではないかと話を進めている。

「ポピュリズムを利用して権力をつかみ、人々を支配しようという野望を持った組織や人物は、もっともらしい言葉を駆使する。そしてあえて、わざとらしいぐらいの表現や技巧をそなえた弁舌で、人々を虜（とりこ）にする。自然であるよりも、不自然なぐらいに誇張された言葉遣いや振る舞いの方が耳目を引きつけ、心に刺さりやすいのだ。大衆迎合にみちびくものたちは、『わざとらしさ』の価値を知り、『もっともらしさ』を修飾することで、人々を思いどおりの方向に連れていく」

■「あざとさ」が売りになる時代

さらに、話は現在の日本で隆盛となっている「あざとさ」に展開する。今の芸能人はまさに、「露骨で抜け目がないことを武器に人気を獲得し、そのことで、『あざとさ』もまた、市民権を得るに至ったのだろうと。そして、『あざとさ』が売りになる時代が来るとは『わざとらしさ』にとって、思ってもいなかった事態だろう」と結んでいる。

オランダカイウ

同じ小冊子に、サーカス学の大島幹雄氏という人が、サーカスの道化、つまりクラウンのことを書いている。本来、クラウンたちは、「For Youの精神のもと、ちいさな渦を、路上で、劇場で、社会の中でつくりだしてきた」。

だが、テレビの進行役の人気スターがやることは、「もっとウケるために、面白くないコメディアン志望の若者をみんなの前であざ笑おうというのだ。主人公も人気スターも、彼らにとっての笑いは、『あなた』のためではない、ウケたいという自分のためのものなのである」と。

酒類が禁じられて、知人や友人と会食をする機会がなくなって、夜の時間がぽっかり空いてしまうと、本屋に寄っては、夕暮れ時の喫茶店で活字を眺める機会が増えてしまった。身体に良いことなのか、よくわからないのだが、夕暮れ時の過ごし方は、まったく違う形になってしまったようだ。

【関連記事】
・「バーのおやじ」、その夢はかなわず
・「数字は公平無私」という思い込み

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.